

## 蕪村二題

大谷篤蔵

### 代女述意

蕪村の「春風馬堤曲」には、周知のごとく、引を働いている。

余一日間耆老於故園 渡澗水過馬堤 偶逢女婦省郷者 先後行

數里 相願語 容姿頗娟 癡情可憐 因製歌曲十八首 代女述

意 題曰春風馬堤曲

とあるのがそれである。この「代女述意」とあるごとく、何ものかに自らの述懐を托するのは、漢詩の詞曲の常套を襲ったものであること、すでに指摘がある。

ところで、蕪村は何故に、述意を「女婦省郷者」に托したのであるうか。引のごとく一日耆老を故園に問う事実があって、歿入娘に邂逅し、それに拠つてこの曲をなしたとするのも一つの立場である。しかし現存の蕪村関係資料では、この前年あるいはその前にも、

蕪村が故園毛馬に婦省した事実は跡づけることはできない。のみならず、仮空のシチュエーションを設定することこそ、かかる詞曲にふさわしいと考えられる。

この点につき、論をなす人がある。蕪村がここで歿入娘を借りたのは、蕪村の母親は対する思慕の念のしからしむる所であると。これは、蕪村の母親が「村長」(『夜半翁慈孺記』)級の家であったと推測される蕪村の生家に奉公に出ていたもので、それと主人との間に生れたのが蕪村であるという口碑ともあわせ考えて、郷愁の詩人にふさわしいとの考えからの推論であろう。蕪村の出自に關しては、周知のごとく、不明の点が多い。もっとも借すべき資料と考えられる几董の「夜半翁慈孺記」およびその草稿、草稿改訂の過程、また面識のある大江丸にしても、その出生地に關する諸説をあげ、「別に村が所謂あり」いつている事実、などから考えて、何らかの事情の覆在を思わせるものがある。とすれば、前述の口碑や蕪村自身の

「春風馬堤曲」に対する「実ハ愚老懐旧のやるかたなきよりうめき出たる実情ニて候」(安永六年二月二十六日付御女・賀島飛騨とていう発言よりして、「代女述意」が母への思慕に基くという推測もまた妥当なものといわねばならない。

しかし、また一面次のような推測も可能ではなからうか。われわれは「郷愁の詩人」という蕪村に冠せられる性格づけに引ずられがちであるが、子規によって歪められた蕪村像を矯正し、その抒情性を強調せんがために冠せられた「郷愁の詩人」なる性格づけは、蕪村の全面を覆うものではなく、また謬る面も多いと考える。蕪村を性格づけるものは、その「俳諧性」にあり、其角以来脈々と流れる江戸俳諧のもつ特質にある。その遊戯性、都会的な技巧性、しいていえば演技性にある。余裕ある生活態度、さらにはあの「高逸」もそこに基盤をもつと考えるからである。

そこでこの場合、別の考え方ができないかと一つの試験を提出する。蕪村が飯入娘に代って意を述べたのは、銅脈先生貞中観齋の「婢女行」に触発されたのではないかというのがそれである。銅脈先生と蕪村とのつながりは、資料的には、几童宛の書翰の一つ(安永九年三月七日付)に、「昨日ハ銅脈子御誘引被下、嵐山え参候而、雨降なんぎいたし候」とあり、「竹筍楼大秘録」(五竹集)の、銅脈の「勢多唐巴詩」(明和八年卯八月三日燈四の条に、「一、四句式分五厘

トヒラ面被下るれ候」と見える二件のみである。すなわち、蕪村と銅脈は知人であることは確かであるが、それでなくとも蕪村が「太平楽府」を読んでいたであろうことは十分に想像できる。「太平楽府」

は明和六年刊、頗る好評で、その再刻が「勢多唐巴詩」と同年の明和八年四月に出ている。「太平楽府」の中でも「婢女行」は特に喧伝され、平秩東作の「幸野老談」に「太平楽府などいふも、婢女行と云歌行、名作なりとて伝誦しけるが」とある。「遠国道出望」奉公、来、京不知、西又東の一聯にはじまるこの歌行、山出しの下女が次第に京風に染み、「八文白粉試塗面 五両梅花初登頭」ようになり、終には「近所有男字忠七 少宛無心依之侍 時見緑出、行処何、二条新地御盤裏 二百席代三百酒 酒籠今宵有談論」というに至る頤末を敘して余す所がない。当時の京大阪では、かかる事例はあり勝ちのこと、それをうがったこの狂詩行が評判をとったものである。その好評に乗じて、恐らくは書肆の要請によるものであろう、安永五年正月には、片屈主人の名を借りて銅脈先生自身がこの「婢女行」の国字解を試みる。「太平楽国字解」なる滑稽本がそれである。「生因は北丹波山國の庄、小字を辰といふ」「生得百姓ぎらひにて、ひたすらに奉公に出たが」る少女が、京の伯母を頼って京に出、年季奉公を重ねるうちに、都会風に染まり、終には男をこしらえて身を持崩すという筋。

口誦不好鳴笑止  
鼻噴道行困太夫  
減多個伏金面相  
無正張出燈籠對  
八寸長臂脚隨甲  
真鈕耳極今不新

という「婢女行」の一節から、「春風馬堤曲」について、柳女・賀瑞に書き送った書簡の次の一節に想到するのは、至極自然のことであらう。

「田舍娘の浪花ニ奉公して、かしく浪花の時勢粧に倣ひ、髪かたちも妓家の風情をまなび、正伝しげ太夫の心中のうき名をうらやみ、故郷の兄弟を恥いやしむもの有」。

そして、それが凝集されて、「馬堤曲」の「春情まなび得たり浪花風流」の一行となる。

### 小竹の蕪村

中之島図書館蔵の「小竹斎文稿」は、弘化二乙巳小竹六十五歳から嘉永四辛亥にいたる七年間の自筆文稿である。その中の「小竹斎文稿自庚戌二月」と題する一冊中に、次の一文がある。

謝蕪村画幅跋 老泉夫宿守田女盛助傳  
樹根 四手持師文而題

題詩日、蒲葉日以長、杏花日以滋、老農要看此、貧不違天  
時、迎晨起飯牛、双駕耕東菑、蚯蚓土中出、田鳥隨我飛、

郡合乱啄、嗷々如道飢、我心多惻隱、願此兩傷一、撓食  
興田鳥、日暮空塵掃、親戚更相誦、我心終不移 謝寅圃且  
書

謝翁山水人物、並皆佳妙、然其胸懷洒落、無半点俗氣、故樹根睡農、若此幅、最為得意之筆、而亦可以想翁之為人矣、此詩不知為誰人作、真率中寓仁厚之意、蓋翁平日所好而吟誦、傷下脫一字、思當悲字耳。

この蕪村の画幅に対する跋文の、文集中における位置から考えて、小竹がこの画幅を目睹し、これに感したのは、恐らく嘉永四辛亥の年のことであらう。この題詩を備えた樹根睡農図が現存するや否や明らかにならないが、農夫が樹下に臥に凭れている構図は、蕪村の画には他にも見受ける所である。ところで、興味があるのは小竹が蕪村を評して「其胸懷洒落、無半点俗氣」といっている所である。小竹はおそらく蕪村の俳諧を知らないであらう。この人物評は俳諧作品とは関係なく、その画作からの印象、またはその人物に関する伝聞から得た所のものであらう。「無半点俗氣」とするのは文人画を賞する常套であるにしても、人物の「洒落」というのは、例の田能村竹田の「屑赤鎖々録」に、蕪村が家人の留守に一人で役者の身振をしていたという逸話を伝え、「かゝる洒落の人物なりしと也」といっているのと思ひ合わされる。あるいは小竹は竹田からこの蕪

村の逸事を聞いていたのかもしれない。題詩の作者を小竹も知らな  
いといひ、恐らくは蕪村の好んで吟誦する所かとして、題詩を評し  
て「真率中富仁厚之意」とし、蕪村の人となりを想うべしとする。

蕪村没後日ならずしてその画作は世人に珍重され「蕪村が絵はあた  
い今にては高まの山のさくら花」(田代小春)といわれ、「雲居のよ  
そに見てやすきなむ」程の高値をよんだというが、その人物の洒落  
を賞するは、やはり竹田・小竹らの文人に俟つべきであらう。

次に同館蔵の「小竹斎吟莖」なる自筆詩稿には、次の二首を得る  
ことができる。すなわち

#### 題蕪村画扇

蕪村画扇、佳句題其中、誰知庶人筆、能致大王風

とあるがその一。ここでは扇中に題する蕪村の筆蹟を、能く大王の  
風を致すと褒めちぎっている。

他は同じく「小竹吟莖」中、己酉(嘉永二年)四月に初まる一冊中の  
次の一首である。

#### 題蕪村画四鶴図

自題曰、李成徳四鶴図、人物二人、一人使人筮耳、一人使童

摩背、案宣和画譜、載四鶴図陸晃画、可知古来有此図也、四

鶴姿四体鶴適之意。

衣豈必用、食豈必肉、筮耳摩背、四肢鶴適、身無所累、必常如春、

如此之外、豈有神仙。

四鶴図に關しては、次の几童宛の蕪村書簡二通が伝わる。一は大  
和上市の沢井氏に伝来するというもの、原本は未だ偶目の機に恵ま  
れないが、頼原先生の「蕪村全集」によって知ることが出来る。沢  
井氏は几童門人可翠の裔という。

弥御安寝被成御春めでたく存候。しかれば四鶴之図早速御見せ被  
下、幸望之人見え候故及相談候処、余り懇望にも無之候や、以之  
外下直成思ひ入二御座候。中々埒の明ぬ事ニ御座候故、右四鶴之  
図直ニ御返却いたし候。御落手可被下候。表具等はよろしく相見  
え候へども論に不及、只々画之おもしろき物ヲほしがり被申候。  
此四鶴之図ハ南宗之画法にて、素人ハ余り取らぬ物ニ御座候。そ  
れ故相談出来がたく残念之至に御座候。先方へよろしく御取なし  
被仰遣可被下候。余ハ期面上御物がたり。以上

五月廿四日

二白、廿一日御会是非出席とたのしみ居候所、家内のこらず梅亭  
へ呼れ候而、愚老ハ留守をつとめ居申候。甚残念之事ニ御座候。

廿六日於金福寺段々可得御意候。以上

几童様

蕪村

本書簡は正確な年次は不明であるが、「廿六日於金福寺」云々の  
記事のある所から、安永五年以後たることが判明する。以前にこの

書簡に注を施した時(古今俳文学大系「蕪村集」)四鶴之図の何たるかを知らず、図柄など人に問合わせたが不明のまま、わずかに「宣和画譜」にその画題の見えることのみを注したが、今この小竹の題詩により、それを知ることを得た。二人の人物が、一人は耳をほじらせ、一人は背を搔かせている図という。ただし、四鶴之図という以上、耳をほじらせ、背を搔かせる他に、もう二人の同じく鶴適の人物が描かれていてしかるべきである。とすれば、この図は四鶴の内之二鶴を描いたものというべきであろうか。ところで、この書簡中の四鶴之図は、蕪村の筆になるものではなさそうである。文面によれば、恐らくは華人の描く所の四鶴之図の売却を、几童は誰かに依頼され、蕪村にその斡旋を頼んでいたものらしい。たまたま漢画を所望する人があって蕪村は几童から頼まれていた四鶴之図を薦めた所、その人は、図柄の特異さから風韻に乏しいと感じたのであろう。「菜人ハ余り取らぬ物」というので直段が折合わなかったというのであろう。蕪村はよく漢画の鑑定を依頼されることもあったらしい。その返事と思われる書簡もかなり見受けられる所である。従ってかかる書面の斡旋などのものであろう。

然るに、ここに小竹の詩を題する所の四鶴之図は、蕪村筆の四鶴之図である。ところで、同じく几童宛の次の書簡がある。観漁狂旧蔵のもので、八月廿四日付。冒頭に「今日楨林会御つとめ被成候よ

し」とあり、八月二十四日に楨林会が開かれた年というのは、恐らく天明元々三年の間と推測される。書中、四鶴之図に関する部分を掲出すると次の通りである。

一、湖柳様御たのみの物二幅、御達可被下候。四鶴の図の内を揮毫いたし候。是ハ得意の物ニテ候。湖柳様へもよろしく御致声可被下候。

湖柳は京の俳人、几童門。かねて湖柳に頼まれていた二幅の画を、几童に托して贈るといふのである。その中の一幅に四鶴之図を描いたという。「四鶴の図の内を揮毫いたし候」といふのは、全部四人を描いたものでなく、その中の一部を描いたという意であろうか。とすれば、小竹の目睹した前述の四鶴之図は、あるいはこの湖柳に与えた画ではなかったか。その出来ばえについては、蕪村自身「是ハ得意の物ニテ候」といっている。